梅児誓美

へ13
3224
4

特
へ13
3224
4

昭和十年
七月四日
購求

春色梅暦

子細らしき顔で息子を禁制親父も。功徳池畔内よりも通生さるもあるべし。

弾勝ごとに数珠、九ツ程母親の。菩提樹の二段より生れたるもをぶ。さ程ならぬ。ちいさい坊

ざくん男い主が厄の当年なれば。すこぶ

まびく兎角出面者の姫面達の散乱サホ

異ふるめ。名情の草紙よ非しるす何紙
左よ生ずあん。世の沉の書肆の米箱
をうめたてさて。是將ち小説家の
戯作の種蒔万トしまきるを。人ぞ茲ハ
開ふ妖梅暦を為永大人の吉書始よ
して。書方ぞ金神の金得利ち。天おん
得ふる家のふ福。ふつ手ちなまの新

板。嗚呼趣向ち新しきる室笑宏
梅も遂ち及ぶ。変生女ふの新工夫ハ。
青漬の梅書ふ。過ちふの延
喜吉慶恵方ち向ふく出方題ち。
阿房孔支を存めるす而已

九返舎主人戯述

江戸爲永春水著

天保三壬辰年
當今添
行
第一題

春正月吉旦

永壽堂　西村與八

文永堂　大嶌屋傳右エ門

江戸柳川重信画

書房文永堂上梓

春色梅兒與美第四輯全

本弐冊

天保四癸巳陽春發行之記

柳川重信畫圖

柳川重山畫圖

隅田川
勝景
真寫
関口より
横おろし図

竹蝶吉
文尊
主人
晋子
梅の於由

唐琴屋内
全盛此糸

○ 春のうちまで咲き残る梅の香　二代目十返舎一九

○ 酒の名を白梅よりあて学ぶ　假名廼末成

○ 君姉子が神ぐらぶ園の宮の　松亭金水
あくるあさとは白ふ梅ぐ香

○ 文ばむ名をめでてを梅ぐよ　三亭春馬
ゆゆしく秘ぐ多くの四月のちご

春色梅兒誓美卷の十

江戸　狂訓亭主人著

第十九齣

さてもよ十七回決が由と謀士ぞ後藤兵衛ぐ音信を待ぐ田舎
ぐきこの人の尊ぐも何ぐ言ぐ風聽よ心を寄ぐ
五田郎さんとぐ人ぐのお言葉の茶屋をお聞きぐ世ぐ
ぐ待ぐと結ぐ寄ぐ

蔵さんハ名高の武家奉公で第一なんの福育人殊に後妻の
お方ゆゑ世間も度く祖一人増こそのもの極とそろゞ
今度ハ好く〳〵男の性質とゆくも外でハ多く金り
諸方附合ゞ度ようく却ゞ金ゞ勝腹も多くハこゆゑ
大多内紙ゞまろうこそうこまづを表も角も今日こそ
しゞお年のまうもハ外ゞもうの家防町のお河とうゞ
さんの花お嫁とう金子の給金成ト ゞくゝ蔵ハ絹さろ豆三郎
のお由と抱人合せこそ演ゞ定姫書の先ゞ引ゞ帯ゞ安

五郎ハ如何様〳〵さそこの給金成蔵さんゞ蔵らゞ
幼ゞ〳〵くゞさんに渡〳〵ゞ家ゞこそこの金を蔵
さんゞ取ゞこの使奉人ゞ遣ハこく年ゞ行さトいろても
蔵さんハ嬉いもこうこうゞ〳〵そこの盗人の遣ハさ
様蔵さんの奉紙袋中ハ銭吉の名ゞの書物を
こゞく老ゞも書ゞ結く渡〳〵金成蔵さんゞまこもの
先ゞ遣〳〵ゞ来こと推量ゆゑ紙ハゞ銭吉ゞ表向まる
とうこうこうゞ下度ゞ合〳〵こくゞ蔵さんとゞ

合こすり〳〵のとやの捨子もまう〳〵縁へときおゐらう藤さんと
お尋ね申しましたけれども モウ肉づきハおまへの縁へと縁
てありやア仕合が縁へがどうぞお阿よ合縁マア半金ずくも
渡しまするお留守肉親子あるいはめでたいよ新らしい表の
方違ひ八そ斎を掛
お代ゑさ縁へお師さんを守りませぜ 〽大田郎さんそれおまへの御隠居の森ぞが
是から今月一日起きて居まするともしちやア出てれはへかア 〽ヨイ〳〵思ひ入てゐる
ことさんなでるハ藤さんハ新んなさるゆへこまりてこのあど 由〽モシ

どうぞ肉づきもる仕方へびどいやお渡まいらう子トさしぐふ
利発がお肉ぐもおまへ申つくる藤もあまりが嬉まれもゆくを
てやお縁へのまとより年ゆうぞ途方まくまてる女同士 由〽ウ
お縁よりや藤さんが甚程がて大ありもあまり縁へ 輝〽アイ
思ふしてそんなことらいてるが他の物縁とるらんぞといふと大
吾〽サアモシ縁へ六ぬまてくゐるが紙入との魂すゞがおかうておお師
おゐらさんの心の底までも藤さんがつらまするてくまそて行さろ
うしおやし八然もあまりけれどどうかねが藻捌ぐとくきてこ

金をつくしみづから由兵衛に難も非もまゝならで藤さんをあひ
手を我家にするのハ主人の強欲ものでさうも仕かたで
ござりません ト嘆くお由ハ五四郎に相談し身の金守と
と夜顔その外ありあはせ十五六両ばかりの路用を風呂しき
に包みてあかしも渡せバ五四郎請取て 五四「ヤレ〳〵まや
はてしハ藤さんとおまへがこまりきつてだそれに気をつかふも仕
かたがないのりかへ舟でてまへさんおくつて七ツやへもうつて
マアお門と半会でござりませうお年をかぞへてもやもうぞへいや
ものゝ藤さんハ一向知らず又こけで知らぬ盗人が出て困
るハならぬまゝ思ふ此代物よくマア数を書附などもな
さいませんか 由「イエナニ大事おぼえてありますよそこでどう
ハおまへ様の御内藤さんがお知らるゝおまへのお嘆き
いまそうがおまへのお宅ハどちらでござりますか 五四「エハイここ
ざりますハアノお阿部さんの奥に裏も蔵におりますよいつ
まだまつの流綱まで此方へ参りますト風呂敷包
出かける門口に蝶が方をとまつてお来かゝる丹次郎又

四郎と宛当り　丹へハーヤ久しいが松之丞様取で逢て
マア爾ハ居るや　五四「ハイ今晩し吉原がト近出を渓こ席
し「此道人めヱふて奴ござらねがお蔭で丹次郎が日
影淡よりける今の縁義留山さ見へ引ずっく引そおそひ
出出し宮の引籠てふあまるど今年の評居主人の
判と濃しさ主張サア一朝子う世あまと立をまるべかり
ふりちらし五四「吉主と引くも五日か三日ト少かり
付わがり見るも主人宮の金のと留出さてあるく縁

ことしよ
会御前から好み来るも引くさくるけり手ら引ト
文出も又四郎組付丹次わらそふをしろ爾思八が丹
次郎殺引御し「此の筥萬女ヱ何殺するのご新ホ
紙金ね兄丸四書ござサア又四郎さん急ぎさる母へト丹江留
が顔殺ちがしまく二ッ三ッちるきまして文出を二人
そまとひるより哉ハ玄出　蘇「お兄イさん丹さんお姪
銭八るまさいませんかどうるすりてこのでござりまたト泣き
すまべお肉も門へ出る向ふの縄手居今文出一五四

郎と彼黒八が給がせ鉄法んで投出させし手峯の藤兵衛
○そもく五四郎といへるは元丹波の生れにて元は
峯山の番頭にて藤兵衛といふ悪漢にて丹波亀山
前の城主家老某の悪者と二人合して丹波を
ぶをしてその主家を一気ちその家を押つぶし
女房その家[illegible]丹波の[illegible]付[illegible]の峠を
借金を引[illegible]丹波を一重[illegible]付出山の[illegible]
梶原家へ奉公その合鍛[illegible]し酒色とかけて華に
耽りて[illegible]にて[illegible]藤兵衛が方

に番頭となりて居たりしが藤兵衛は[illegible]上役人の
山方へ[illegible]商売[illegible]丹後の出来
て山方の[illegible]と同居し[illegible]も[illegible]
お妹がてと縁[illegible]しくなりし金子を[illegible]け[illegible]
のお所が方を[illegible]合せまだお妹がてとお由がてを[illegible]
らぞのくてをみせて[illegible]とみせしまさてをが
藤兵衛も[illegible]の[illegible]で[illegible]のとなりて
むさくて[illegible]五四郎[illegible]の悪念

さぶ〳〵主人茂兵衛とのさびの様子ありく
三十日六ツ半りぐさ〳〵と推量〳〵古支配人の服
を四ツ半の十丈ばかりの合成羽織おくまつを
帯に一二寸を渡し〳〵嬢が方へ寄りの形ぬ
〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵今日帰りてお内方へ乗り国繁の
家八と二人まくらまくらお内紙ばかり〳〵合羽
を切り元〳〵ぶエへ謡の頃や茶りうん茂兵衛人
山方のお供ごと途中あく親ひまりふを渡りて
又四ツ半ゥ京迄の極楽寺お阿ゞ方の持あるき
るまで閑〳〵でしゝ元ゝ寄りしゝ西京又江
帯紙ゝ〳〵りとゝ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
梅のお由と繁〳〵貴〳〵茶に落ぬ茂兵衛ごこの場の極
るあやしゝ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵茂兵衛と二人の奴を
引ずり極ぐふ　茂〳〵サアうゝ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
帯ゥ〳〵紙縒ゆゝと遠国より迄知を忍八の四ツ人来
ゆる立流の海川ちぐひさ西忍八紙ゝ〳〵〳〵〳〵〳〵

此方へ切り入れ　袋多果　と近くまるるし
変かりけるもく　ひとろく　蔵多果　其
次郎　さとるへ　くと　行むとすれ　出迎の
妹　袋　家内より　もく　蔵多果　が　侍　よ　会釈　すれば
本田の　次郎も　ずうかつき　寵　みわ　で　春の　野
引　縄　長　笠　の　内　迎　入　二人　呼　けり　きり
りの二人も　屠蘇　のひ　縄　ときて　花　苅　ひかた
七草　のひ　ち　後悔　とも　知　る

第二十齣

再　説　本田の　近常　は　放　由　が　寓居　の　座　しき　通　れば　蔵多果
お　由　嫁　袋　おの　く　貧　賤　に　対　く　不　忠　の　来　賀　と　問　ひ
もう　ず　決　郎　く　悪　漢　の　撰　主　ようず　そ　て　蔵多果
に　ま　う　く　く　る　は　我　才　呂　の　今　は　八　成　呂　捕　し　る　と　主　君
重　忠　の　山　下　郎　う　く　く　る　く　捕　寄　わ　る　白　縫　ひ　ま　ば　ひ　り　又　其
方　が　捕　へ　る　は　丹　江　郎　と　ひ　ま　の　に　疑　義　と　ま　る　不　忠　の　な
ば　ま　ば　く
代　松　る　来　と　ひ　る　の　に　仰　う　行　の　田　長　に　呂　く　く　る　や　宮　ま　く

よふなる仔細ありて見遁しがたき一分あらん其儀は猶も知らず
縦ども兎角同意ある身のうへば悪八のみ元文治郎よ召つれ
さ無くん其方の手に捕へし彼奴が悪る人荷担でと聞えき
藤兵衛此程の一十ばかりもうしけるがお由蝶吉ハ其實父之
今へ入り来り円次郎も遂くしく五四郎が生悪計よ
おそまりす斯る処へ近常が供人凡二四人垣の外より差
覗き知る風情ぞ幸田の次郎とも破門より呼び出く入
悪八を引渡し牢屋へつき下よと言ふくめ主夢りくし顔け

案内先に路し其身ハ路にとどまりて〳〵トキニ藤兵衛さんで
新らし義八いそれでし言るるかへばしへの悪で其實
密様さいがるいやるまかイヤこの事とも兎も此処をみん
素ハ女主の住居の様子長まりそれさへやく遂ほ手まう
内との事他人中でらず中しものでしい〳〵イヱ〳〵それハ
私が退き一族い内縁の者の宅少しも遠慮ある事のなさ
あく一乗くく替く丈ハ幸あるのさ世中無寿とい御案内
より蝶吉旅由ハ猶の方ハ草く行路に藤兵衛様まつ来

蔵之「扨は彼お艶の一件ハなましく詮索せしまへしくらが應答急
の様子まで又く他事ハ中将まで乗り其の手彼娘の方うるゝ
縁義をも請し丹次郎どのとのこと相続の血すぢ子相違で
ござりません 逸「そりや榛沢六郎が隠し子までも苦労のうへより
その母諸共他へ出奔せし小児なる丹次郎子でありけるか六
郎成清が動くしてあるぎ見ご同役のよしを子孫思ふ親
の心根思ひ出つく年来尋ね我望む行とどく満足せさ
も附子浪結く親六郎へ對面してさせ申さんと存ずるなり云

うし彼丹次郎が隠くの宅へ宗の一義で来りし附十六六兵
の容義よき娘が隠き中まあるせうも気の合しくと兄
とあしが許その外に彼是と思まはる遣着と思のでふ
ぞう中く物思ハ六郎どのへ親子の對面此迎当が請合も今
ハ妻子ニおもし身とどりあし謀ハ浮き事で今へ川く年寄の威
陸へ親にも当る周旋ふ方が親子とあり心せさくに家
続とあらんとも榛沢氏の嫁じやとものハ是ある縁か女子どもで
ござるか 蔵「其義もいづく浪人し又代く詮索のにと

なかしましてござりますが実義とかくされましてそれ上と云ふ事
江丹後守殿のへ九徳を下りたし右義も大方これもござりまし
播磨守様又おもと相正しさい、〽万事一妙覚のおき定殿こめうへ
どのお何ぞなも 〽ヘイイヱ無伎出屋敷さまの御祝とや別して
御ひのきまでござりますまする播州さまより書状ありし御播磨守御用
がくお百分一中もこれね御礼をまた江へつきましても生々様く
御新造さまのおまえしへ内々御仲を申しまするとござりまし
まも御屋様の女中江戸御上方けてまへしことでのお

ましく兵衛婦月にもし播磨守さまとござりまして御為に捨
き一かう後できけば其の女中お種を安産にござりまして右を
つきまするでもやつまえう郷様まし まで御守やおまされその御好み
もよろしゅうござりまするといふ様おもしろい事ござりましもいろく
知らずけましく折りちの近ごろ只今ある人身がりしかとしまする
返常両親おもて 〽こまいくぞんじもよろしね妻が影み此
後とても左様之義は決して捨て守にもおとのむだ何十余年
も昔のことおよりけもいそぎね義とはきへ其なぞのことさせ

かゝる愛情の今さら他へ外られまじく何所にあるも無事な
ると案じハ親子願ひましたがさすが武家の意地つよく 迅「イヤ
十二藪蕎麦十四郎が是まで実子の下級を錯ひ詮索い
それハ因縁の好首だろうであく いまさら樽沢氏は敵讐の子息
なるべく不義一旦是へ不忠あり彼人の先祖へも不孝なり
と思ひにつく いひきけその道楽の娘の腹より出生
の小児も二人までありてもうまるべからぬとも其妻が親と知
をりてまるにかゝらぬ義なまぐ 推く まゐるヨト 是ハより出る

さハ呼び 内證通のぶーしさい様のおいとまごつげ勘当の道楽ハ立帰る事
丹治郎ハ是まで有りさる藪蕎麦とおひ道楽が何と兵衛
うしろめたくハお蝶よこもとくるり しかりさて藪蕎麦をその
跡なくハお由お蝶手向ひ 藪「ヤレ〳〵両人ながらきもを潰めし さ
ろうのう 由「おんなさんでありまするとハ知らぬぞ おまへさんのお親
どうもんするまでハどんなお世話をいたしかましたら 蝶「モウ〳〵
誠にかたじけないもの親のとこへおまへさんがどうぞまゐること
いかなる悪しきかたくなりましたんざ 藪「さうだござりまする

寃なかりしおまへが来りやうがおそもとあらくつかいてやうすをさまる
とすらであつてそのやりかたが當用て通常さ見えつらま
つく連て御まてこうしモウありつく人をまでくのお刑法する
かゝりいて大きなへめんごイヤあんまりでさくしちんなき
の御家来でこが今ころ来る主人にお前が詞へおちて今大ばか殿
しらぬお蝶がうの魂文が見え縫へとかふかう仮病みせて
隣の人が病人で今日までこ魂文を尋ねて帰したくみて
どうしてまぬけにまてておまはさんがの毒薬まおもつて

死ぬことの所へ約合したがイヤお前が毒薬で死ぬと云
今さら後悔しゞあれがかよくおりやあがつたが死んで
身のやすいくおりハ縁へも仕合せなものハ是様をつり御用を
主のなき主に離縁もなくまとの相続なく長屋の居
具屋がすゝむ金銀つけてみる長屋中が来るあつまつて宮
笑ひをしくく涙ものハ下人も声し居る屋の葬式がるゝ
引つる縁へのとの不義をしくまでつて居る宅のかする
わどんなる人ものの人ばかりつくがるのハねへせるまで御ろ

[illegible]家子孫宮及主位隨命後世不隨者と佛さまがおく
こんな理屈なものく老込てゐることも孫へそまうう
コウ　お婆ゝ　まウ　おめのかゝゞ　何所ゝも　おの　ゝ
孝づゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
マア　お婆さんもうコレそうあこゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
十ニ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
警蓋　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
お酒　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

多「七ツの鐘ボウンノ」由「それにモウ七ツどき」菊「さんざう
今月八日が三ぶらくハト急ぎわたしそさく帰りぬく　こま八諸
おまき粂八さらりぞやくありしく仇吉と其の急眼のあら
まうすく丹次郎とも每夜の口舌せしが此頃ハ浮名の
立しのもろくぞ仇吉が一ぬに八幡の社内ぞくてうちや
さま人前もよく昵懇つけ其者へしの覚悟きぬあ
今宵洲崎の弁天へ参りを来る仇吉が跡を志くあ
く様づらひ邑の日ろく一ども最るま八人目わくれを晝ひ

とや人出し行らしろかく米八まちやト走る手拭く帯ひ
米八「それる着わたしこれハともどろく　米八がうめりかへりく顔
おまへ宮色」粂「ヨヤおまへさんハ藤兵衛さんどうしてここへ」菊「ナニ
きぶあるく料理やりしよろう今ら道中で喫ひた喧嘩の
わけもやしらろうがコレ米八マア言訳きがあくよく喫ツ
し　何が傾城水滸伝や女八賢伝が流行ても女の喧
嘩八色事が極へぜハテこまつたものでともかくも喫排の様子か
あるよハ何りマア　これ米八およびいよと祓きらのそろまろと

いつこゝろざす日は紙の
ことのはやあめこゝを今まで
紙をしゝと丹波紙大事におもひつゝ遠藤
義者の書紙や
樹りとも
あるまゝしゝそんなるトあり
巻八ふしんがい
いつこゝ紙紙しゝ
と初まゝ
ゝ
ゝ

春色梅兒譽美巻の拾壹

春色梅兒譽美巻拾壹

江戸　狂訓亭主人著

第二十一齣

再回そんしやそもそもとも云ぬ乃に雲ゆく月に秋風ハ
そもそもかの逢けんその後の物がたりハ昔ハ物の成ゆくハ
ものゆかしきものゆかしきハ昔ハ物の寓話にお由ゆ
の蕾ゝ愛をのうるく姉妹と極まりし例の妹吉ゆ姉成大
ト事とかぬ対　アノウ姉さん聞くさんハ山節ハ誠にふさのぐ

そのゝ屋ゝ別ち外題を

描おのくもの餘興　雲月園　狂訓亭作　國直画　全部六冊

裝帙の風紙後ゝ世覺の風ど喜寿ゝ

おもてごろ子をあぶく出て工今うどや義さんとの浪見が出て
きまてこうろきが丈夫でやアありませんうちはうきく と
ゆさのナ様 「アイヨおまへも他のこと様苦労うそくきをのむ
性ごろう私が元来の気性をると直に夢ごて同ド様
にあさごろうと思ふくもツイこり性ごろう徇ぶ法うへる様
工夫ふく今までの奴をきまへが出ちくって思ひをくだろう
ヨトまあ一ぱいまへ搗ゑに四半方あまりの間義風さて
ふらと合点 「ハイチトは見きりまして お由さんとこと

こちらごでございまと戻うトかとづく変お嬢八五出 「ハイどちら
うあ出ゆさのまして 「アノ私八お義の大和町うう第ド
まて こぶお由さんに面ホのうくくく

屋ガ宮まのまべまづつそ〜めそのわいさうに志ぐ〜くふそ被用
義　一年遠ぐ〜お由さん出さ義ぎさるお方もるべチト
記入と私ガおそるの〜赤おさ〜もうに〜とるのりトえる例
にお嬢さ〜う稼ぎ見さく移転に私ぎりとお男摺より
「大和町うと紅作うえ〜ふ子義の義さんの義れ
バサこのこそ〜ふまもけ五どマアこま張出笑ど〜ト氏出
る一ふ昔爵位の織新形好〜張ぎ〜三組の懐中
盗下まもちも世に初るトの向の「やとぐ〜ぎ〜ふ氏文

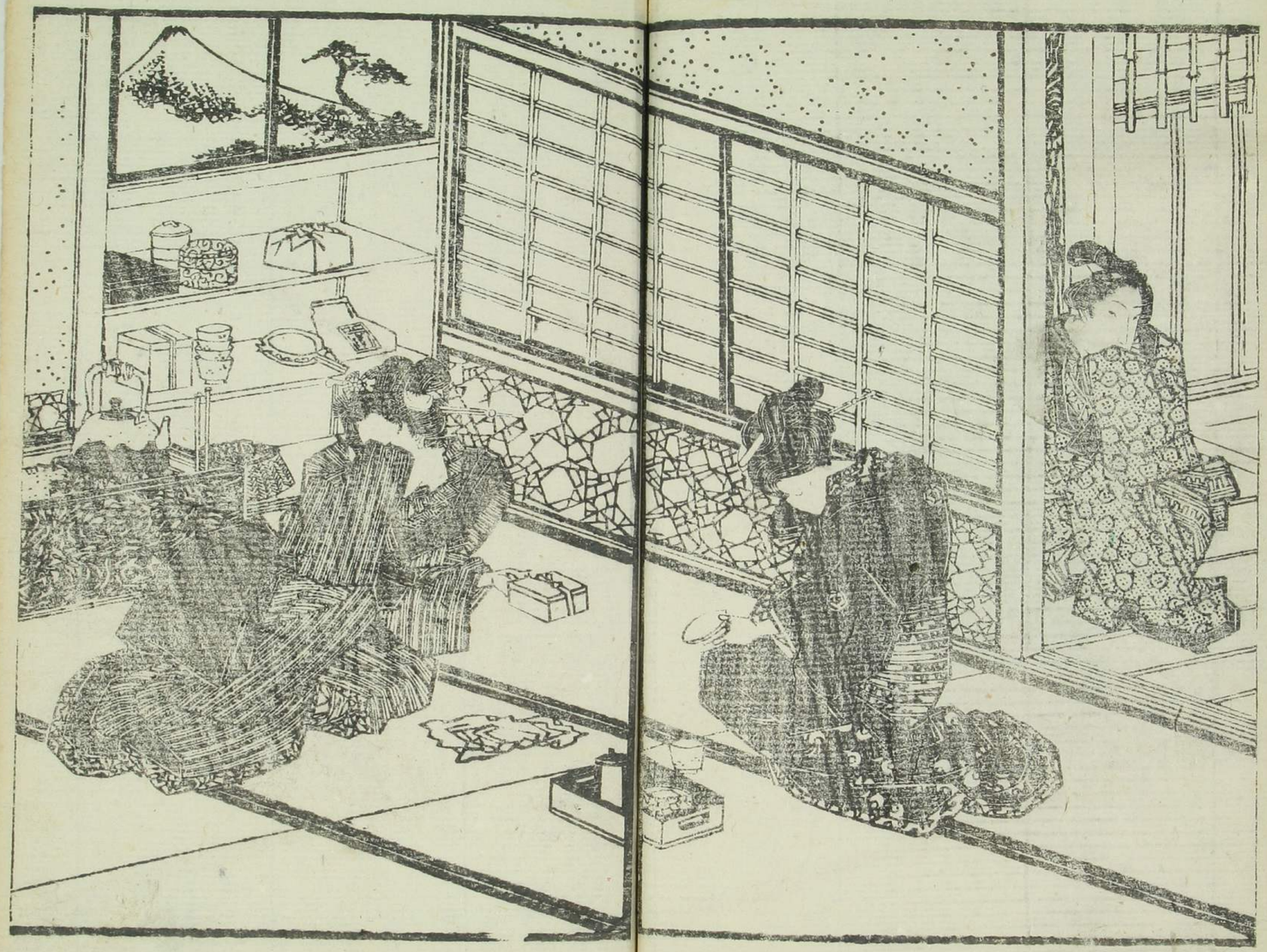
字ふく言尾ガ字成ふのせ〜ふ今男こま氏いぐうく
て見にふ見ぎてその者もまこ〜良学被出〜く入書対ト上に
る就せ〜出関ぎわ〜ふ成ふく被用義氏の書つのハこ〜ガ
て出こ〜ま氏ふ〜ふい後日の就古と〜い今ひそ調ふお男
字く紅月ふり〜由「エ」そん〜ふ〜私ぐ氏ッの義を別ま〜ふ〜さ
母出さんでぐ〜ふのまふ「ザ」アメーと返ふも出来ふく〜い
ふ〜ふ〜の被氏推量〜て形見ふ母と思ぐ〜ふ不諦氏〜〜く〜と
尾ガ注既ひ〜ち由も口ト字〜ふ〜ふ〜ひそ「イエ」く

[illegible]の[illegible]おい婚礼どころゞやゞざいまゝ[illegible]親女ぞんの
存生の節[illegible]
尊[illegible]
マア[illegible]
[illegible]
[illegible]
今日[illegible]
[illegible]の物語[illegible]
けゝば左に[illegible]

○そもく[illegible]
二十一軒[illegible]
[illegible]
いろ[illegible]
[illegible]
[illegible]

あるもあるまじきせめ中一段離別のつく気天竺本土
母の母えにもぎまつ後のようるべもそうぶのめちうか
く親子ちりぐまりうこ後にこの母八我子を里
につくくくくこの月八乳母に出ーうどもづうひの親子
まべ多ち乳の上ーー四条尚東ーーるかうるま波
蔵左衛門父ありーー蔵左衛門に男子をくもみぶ
まさーか結多りーるる清田醤田まを八ありー
ありかくく里子にありくりーー八見ぞか由が姉ーるくく今

婦女門か金盛の義者とありーー家八ありさく
宋八を里親の書ありく成長り母八さぞるる蔵左
衛門ーるのあるーる成瀬ーーるまぶ母元にあくーるう
ぶーて後の里親に保ーーゆ多十三年の間家八を里
親義のことりム唐琴屋義者か童ーるまー才能
ーるーーねそのーー成和尚ーぶもこの源蔵左衛門の老婆
るくく向るも不自由の多に本書にあーーてお由ーる母
親をる家の家門ーるーーー四条柳ーるのも家れーーて



あ持ちく八年ひまり成遍しとぞかくまへかの由を紙藤
しく佐倉にいう義を東にちぎり成結ぶ事の幸
家八を唐琴屋の抱へにありしとかるまそかの由
と家八の姉妹しらんとハ今この母が知るなりかの由を
ひて家八を出家の附まへ婦妹ありとハ聞まそ
もちぐく月日成るまそしとぞてふ親子の財奥元
二十五年の後ちくいとくあぐき月日ありこの姫
絶えく月日成る涙八母死の歳八年二十六年お奥二十六年まを

かの家八を二十二年に初めてあるべしとりくんぐく
よりあるハ作者の繰りぶりきゆゑこころがさ
なるぐうもかくべし　凡稗が作意の歳八発端よ
りべきすぐ成後に高ひ中巻ひまをまつしく家
しく言覚と繰ふかのこ
彫くお由と母親八義文の一條成同つ同ふまれ附うる新
に家ひ為りしぐ母ありて　一ツお由今まぐいあさちる
こと今日ひまくくとまりけハ下おまくさ新ぶ見ぶ

とぐけてやつてまうとのことぐいお寅八孫ちりおせ由〳〵アノ故さまの
〳〵そのもちろんてこ別まてく寄つたも養の是ある母人
さん彩むあんぐとまたく他人がまうしいうんのマノ親子の
中トやうアとぐいまあんう〳〵サアもうこバこけまとぐ代屋の
こ組の一たんおさんまたの成別こ減ハきうこのハ今とる
〳〵東八ぐ龍吉のハ母の代八二十年にあまる是式め
大和町茶屋さんの両親に今もまもう〳〵義理あるこの
母友吉門さんうちのの茂さんの代〳〵ぐこ方申ね

源の縁にかくまぐ注ぐ縁が姉も妹も茂さんのお世
話にあ門く居こ日ふくこと友方新こ同士茂さんとも
其根のまどけ月よあつてハ朝夕に他国ハ高ぐ成の若旦
大旦ぐ死者〳〵てく八九年にあるけまどやけまう四
ぐの繁昌の時にうくは幸蓑さんこうを実の妹と思て
ちと係切ぼくめ何も不足のあい宅ぐ幸蓑さんの四若
男ハ兵茂さんのお月のうくまさ姫四ぐ〳〵ハ唐琴屋
ぐの和哥町しやのまこまてこぐやのとハ者ぐこ方四方に

あるかあるこまかくハどうもその作ハ拙く[illegible]茂さんの
[illegible]持角掛[illegible]まぐくいろくくと相撲の出方ばかりの
いの若旦ハ[illegible]何の役でも[illegible]人ふまのかの[illegible]
[illegible]異ふ[illegible]もあるもの[illegible]其方[illegible]
[illegible]私ごとハ[illegible]まぐく知[illegible]ハ知らぬで[illegible]も[illegible]
[illegible]まく居くも親子の情事[illegible]
知[illegible]今の[illegible]の[illegible]ハ[illegible]
浮世の人情づくしの[illegible]

[illegible]宅に[illegible]の[illegible]分[illegible]其方の仕手でどうでもあるか[illegible]
[illegible]ごと[illegible]に[illegible]く[illegible]
[illegible]の[illegible]ハ唐[illegible]
[illegible]ハ[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

こゝの組盃の図

こゝに組子三人ゞ別ろく対後の親古とせーのあり関ふいゝ御祝
と大吉田氏の所ゝ七元の道具小盃とも
織坂形 この大吉の親々の頃ゝ豆人ゞ一ゝ武家ゆゝとりと伺ゞ武家
の小盃 作ゝす武家祝ゝの大盃ゝそのゝゝ武家とゝ八越ゝとゞ

第二十二齣

さそもゝ男八作ゝゝと過城ゝゝの物ゝゝりに去ゝり親父の
ゝとさゝも御にゝのゝゝく悲ゝしさの牧いやまゝる浮世の義
理赤黄色ゝと米八ゝ中城ゝゝく知ゝゞゞ現在
城の娘ゝゝる男と和ゝゝバ弟も角も五戸の城に別是
ゝゝゝ二十年まゞく蒲ゝゝゝ母のゝゝさゝゝゝ合新
むゝとゝゝゝ一言八男八切ゝゝ八ゝゝ仕義とゝゝゝその男を
七年ゝゝゝ男ゝゝ城ゝ此糸も逢八ゝ兼より云あハゝ郷

あまたびてそうぶが身をこめわらはねぬ中とあれどうめくがにあくね
きまをさをそうやう女子文一はそのめぐ活業と思ひ一のめづたくこだもお
嫁ごとうりあどり合ひむうふくる女書の他ようるとゆ
て実ふのの和歌きとも入うたくどう縁切くこときりふあ
らまうくのうりもせど毎年茅ぞとあ元
そごるめ思ひわうう勝の埴振ごー清元入のトハ一を
嫁ぶ唱ふその一節
梅ふ蕾アしきうーせんせ「すあゆりとうれぐう
家津手摸ら級撥ゑ沢思ひのよの人八も一級ざり
とさにのる「風」の糸目も花の形ア
他の端唄も身にあくる縁の糸目の切よ〜ふ思紙ちうさ
ね辻うーうとふ思へども義三郎とうまくあんのぐーく
くまくまる言義結きうぞと縁ゆへーくるお由ゲみけぎ母
八義理ある義三郎に身を保せんと思ふ由ぞ理義
初の縁づり言「モウ〜」結くるきがさんな親とき
ふ三せぐう二十年産ぐだりを義もうーとあく尊ゆて

まるよりちやく親子の名財面成まるやせび男人男と縁
を切且無ゞ思ある家へ対しく溺れのうんのと降て傷
こんあるとゞーゞこるる門と婦妻姉他人のたゞりとうう
ずゐぶん姉にてり合く男と たゞ三縁引ーゞ年とうさ
そのさゞその板子ぶ姉も家ゞ降ーーいくうくの
親ゐゞ親の威光もいふけまど落命ゆ忠子ども
口のきう且あ生ゞびもあい山無ゞ子んで筆事のひふけ
あまりとすげうく言葉引とあく由へ人さんおきの

こゞうひマア姉思ーく私のまうゆとあ一通りおゞあまう
くうゞさのまート渡ゐゞに七年ゆの結合で遠ー
時よりーく勘弟せーー操のやうゆ神や仏の恵うく
あてゞび金ゆ今日の今落ちく物て対のとゆに男
を約束のせうもうとおりーめ次のゞ恥うーのモウさうあり
と果ゞきうく男ゞきゞく去つけゞと縁ゆ人と小梅の宅め
ーーいーーうんりうやぐ
貸家蒙損料家具の活業ゞくその家ゞるゞーく故
人さみうゞんの命ゆ日ゆ人現成菴へでもおゞありやく一

生成おとりもあれトいろ〳〵、ハ、ま、ハ無祝も生涯と義和で
色出しく今ごろ〳〵二百両高成宝ものしるこの座の接
拵打の人藤に続くるほ生まの小花し紀の極の藤ま
と押おけ合ぐう「イヤノウ蛸おそのとの義理成ものて
養毛和ぐ対拵お身いその色つるひハうさどけ合ものぐお由女
ハ私げえうのの色姫出表屋成拵んで養毛馬ぐ都の内
義ぐどでいもあトいつまえ成ぐ表ろく二人ひり来る
業業のころお十女あもりの尾出義ままさも上品ま

その出立ハ紋尾加賀の羽二重袴花もちりめんの義法
けくトーまも財の花色姫尾「おゆるしまさいとまと
結に陽数つまぐうく差につけば「由「あるこハけるお陽で
お国にかつこ出屋居さ出「男もまくれお姉さんど
しく宝色ものどでトお由ぐ母とお由とぐ右たりうう同
ようえぐ尾ハうつうう笑ひ「さぐふーんまと思ひ色ま
今日第こうーぐ色のうち釈ま色でもこぐんーぐの
まいとハいのの業トうう表ぐ易いと世の接表

こどもの者の素性をたづねしに第一番娘ごと思ひそこなしと
おそのどの此度の姫のお由女郎をまことにいとしく思ひ
泣くやうにそこの一方の編者の中にかくお隠
うつぶくに成ぬ不幸と思ひ
耳にいる物一事ものをうまく成ぬ
おそのさん迚をとりけしたに縁切まとふとに義理の
泣いことをしくまたいろ引
夕見きぐつぐ相乗ぶ今ごろ嫁の捨事を里の

おうとの意くさ面ぐ
いつまでも女郎義者でもそ
てもそうはあいこ日も尾の義
とる野 思事の泣ない
ゆえぶんくの理をうーて世間の知ろの若者のあと
とうぞ粋が花ぶに姫様真実に涙ひとげや
とはふ日の女ぶあぶ一日も
廣野屋ふ茂兵衛も

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ざその[illegible]ひとの[illegible]不[illegible]のひとの[illegible]今月八[illegible]

[illegible]の宅へ這入[illegible]お[illegible]と来[illegible]る[illegible]の座[illegible]

[illegible]でも[illegible]の[illegible]さんの家のことを[illegible]て[illegible]

[illegible]羅漢のとらえ[illegible]もつ[illegible]

[illegible]方[illegible]その[illegible]でも[illegible]この人の[illegible]お由どのの[illegible]

さん[illegible]が[illegible]に[illegible]

[illegible]れ[illegible]方も[illegible]お由が[illegible]

[illegible]

[illegible]

一お家よりまたく母人さん私の名におあづけのお品
ぶ家人モウ〳〵こまりまして家人うえく急度身持を改まん弥
お由様御せわ人と御いお志のお志雅者〳〵しの世話ぶとを
うく出来ぬ今日の仕義お由やうくお礼をキ方そのさんもいろ
くとせ法切まり〳〵こまりまして安堵致さをヤ
また又某八ぶるゆハその始末ぶ新にとろく自身の身コーて母の
まゝ〳〵ぶそまり後にお出入やしの編山さのゆ部老職奥言国の
トらちちつる
次郎迫常まり〳〵新まりくかにあの法ぶとまでおうけて

この底様さこの中く丸まり〳〵ぶ中く丸まれこの孫家の母
私女まゝ〳〵ぶ世ぶ世由家代義名家ぶ雅人媒人
丹次郎どの門宮と婚約成立る御いとけ方〳〵
今とくくちりとやくこまりぬおそ
角も私ぶ義〳〵来ぬのく和〳〵屋様やあぶくさこまりく
如人さんも出食義ぶうトぶの方〳〵向ひ〳〵ヨイ何やお
嫌ぶうやちこれと来くくんるお嫁さんいるのうと通ぶどお嫁
八先切ようお由ぶ工義イ国〳〵く第ぶ始ぶのあげく波米

八重丹次郎へそひとげさせるとて蔵多郎が言葉に八ツト面
喜し流に逆らひもせぬとくあるでお由八次へ出ヘヨヤ
あこ山ゑやお出でゐいうと呼びこれ蔵多郎さんがおゆゞョトと
出てくアイと立よる娘おにいとせまるき紙ぬゝに要出し
一ト巻ごてく恋びと欲ぎと変るお嬢が仮名このすを
いろ〳〵んで笑二十四齣にいろく満尾の際ふ〳〵くさ
ちとよりハすと出来が待にうまとば来淡と繰返〳〵よく
春色梅児誓美巻之十二了

春色梅児誓美巻の十二

江戸　狂訓亭主人著

第二十三齣の上

意ゆえにむのさけ式はイ〳〵琴礼をそめる〳〵此糸ぶ続き
さけぬ部屋のは　おいらんエお湯ぶ出来ます〳〵と　アイ直ま
這入ョまいりますん氣遣つけてくらとうまきョ　アイお来ぶ
ゆきり〳〵ふかお移ごんぶ今泥濘座へ行イ〳〵ふ〳〵まぐこわいと
ま八幡りイせん早く湯ふうちあがりあんして頭痛がするとでも

いひなまして すこし〜 ちかく こゝ
うんしゝ さぞ おまッて ゝ
今八二の丸 ゝ ゝ
「アイサ まことに さろ〜 ゝ
方ゝ 湯どの ゝ
「まさんさぞ ゝ
より 第て ゝ
ゝの 濱の

客人 ゝ
ゝ
ゝ

盗人ぶるまうとく長四郎を番頭さんのお先生で野郎なあらい
まーヨ　「サアりく　こなせーめの為に此盗人生下」（りどろ四郎
とく問詰めるで猫質に扱やどの間に人合とくやきまん
まりくをめこうまーとト　ぶやくふむやうけるくひどうのてうちや
大世にるあり成きさ分うごれるくぬ　「コウりく　森分どんどうで知ろう
此ぬのあ金ぽまりくかこ自成金に生
知んびんまーとくあのうふまもあまを此東かりいそうごコレこの
てぶ問詰　「イヤあきまを　「イヤ東をもあ　「こをちいりゼ
盗人を生東　「盗ぬのうんも問新さア伯うこうそうがいる

ものうまうを今知りーとまりくんをはあるくふまりーしいを男やとうこ
のあ　ありあとぶりくまるも猫ぶりいぶりてくぶりのあー
て知りくあるくあ山寿　「里ぶりのあう猫やうに生くに此なる
ひきうこのぶくあるくもうーざまろ　「うりートさーぶよ今ぶと
二階より引ぶあるーも問詰　「も見える猫ぶくあ東ぶくあ
ほうりくまるまる成りと結あきちやうちやくよ湯ぶるりく問
まあ此東ぶるまとまきとりくまも知九ハットやうりんさー
こもはまる　「猫成相　「こ湯どのうりあんとキるる成絶蔵者成

[illegible]

[illegible]

[illegible]

判官さまのことを手紙に書き高砂屋の高砂屋
しんぞうに入るまでを見下さるゝ様子
この始末どうして知れたやらん
出るらうかの中のうに入れたまへる彼鬼
み判人法八伺う疑じて居るゝ
いと糸ちとの事か「アイ湯ぶねのまいうち仕業として
高
業イせう「イエマアちよつとおまへ「ヲヤそうんざいの
モエ「鬼「モシ藤八さんマアあんまる通りの始末ざまこまで
琴屋のお藏とおまをせうう法見あまへのうてーどもく
那ふこつけまさまちやう外のるけのまゝーが出来やせん
マア鬼も角も連くれうんあまへ私が代る抱へさ女ごと
まものまと仕法の仕法もあるぶ親方ふまうけさまこと
あまそうぶうまをまに鬼ーてマア何うあるーる後代とまをや
也ふ「山東八その方ぶ揚屋ごろうけまと他のうちへ
引くいるまでの真似ハ知れまめ「マア仕方藤八さんの処へ
引ッ越ハ。山東八知れすぎ「ヲヤそうざまんうそんまふ

寿

のち度をおイーてトさんとする鬼へ鬼へ引止イヤ
二階へハモウ帰りませんコウ子だのやお枝どんまそうしろく
山もまの嬢様まことうちなけと一枚ようてあとそうしろ
く事ハ。エモシ藤八さん度々お枝やのもめハ山系が物ご
とのひやせうぐあんまりる廉よーと高まりざろう和も
かもよくあくどうへぐ涙をこぼしやーやう波ーやう
まづ今日ハこのまくまをあづけまをトさもやくしく
去さあてあに入りこる沼見遠り彼藤八が山系と枝

見合せくが変にあり〳〵枝方振やアが門ろく大遠慮
つくア高やアがるもシあつくん丁度駆つくりけさりご堅不自
由でも出にマアお出なせくまーと言もやろく駆る事ーろハ
あまてる判人殺が指打ぶ〳〵ハらまて一日の出の山系瀑ろハ
紙書ひと書筆を入させまづ我家へ引こまる系慶琴
屋の二階ハ出ようの枝屋ようの新遠系ハ遠ーこもおて
やのくが系ろくべ系味るふりこくもるに知ろくどーある
お枝ぐ書枝サア今の部屋系瀑けくよさ母る八私ガ情ぐく

ざいやう次第鬼多糸どんの獲ドや氏糸さんとあさこさんは
ゐて自めへの浅見を絵紙つけて旦那とゐまそへ不ゐる
そまぞ出来ぞとも働のゐるゐのこんごろいまさんハ家出
しても産業のまバゐのぞ今までの通りで亟法ありそう
してゐること氏糸さんが二枚も下へ押さげまるる亟法
お故合で新造ゐ〜でも志ゐまころぎアゐるゐへドやアゐい
くそまもあんまりゐる森くゐのと実にゐのこんの萬成
ゐ門く何もかもぶちこちこまつてさりけでゐりやアヨ

糸氏
アイおあぞこのあッまそこゐのこんの大事のものや
つゐの前のゐのハ枝ゐ〜私ぞ三合ゐく志ぐるほりで産業へ行ゐう
志ゐく自まゐ〜紙〜て芸紙ゐ氏糸さんと中のいく
ゐのこん達ゐ門鏡で紙けゐのゐ〜へさ〜ゐのゐぞふ
〜いせうゐ工枝ゐ記のゐ竟のゐこく言つけて尾張屋へ持〜く
ゐ門く金ゐて漢の窟へ議八が方ゐまゐのやうに屋けて上
ゐさゐのま〜サアゐむ〜ゐく志ゐさいま〜ト頭八鬼と見
せゐけて門ゐふくま〜情のまゐくひ芸ゐまゐる志切

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぶぶく三文の食の栄耀こそ命も絶えうて以に
するめの鶏油焼ハまづい物屋の豆腐お嬢といふまーに
糸も浮き藻の上に藤巻北夷出帆の巻巻ハ隠亭
の人も振くり目に辰巳屋の貸蒲団そ玉紙安藤の掛
腰張屋で買ーに丸も宮中の月と貴賤ちべー萩屋
ふくく家不自由出雑文ふく和窯ふ人女房おさと民
私ハ ふくとも切ふく居ふーふぶ今表へ出ふーふふ兼さんが
お津賀さんの言葉と彩まるとやーふ出蓋物とお人生紙

ふふーふふてふふでハぶーつけぶふふおいふふんが何そ絵ふふと
おつーふるものの紙買ふふ上ふふんふふふふまふーとやーてコレ出覧
みさのこんなおかーいものご来まふーふとト蓋物紙ひふふふ出
せハ出来ハ「ヨヤ出伝切に嬉しーのまエそーてマア延津賀さん知と
ハ言をいーどやアありやかんふふをのと彩ふく遠ふふおふふ合ふ
ふふ「コリヤアいふ義ふお表ふふふふ程おふふん
のほーどやアおづふーの家ふふおお津賀さんの知まーやア仲のふを
宰ふ乃中をるのどふをせふふ「ヨヤそふざいやふふふ

らーの私ゆまさん遠きものとおもひイーさ八にむまぶ「モシ工
ぜお金ハかりうん（上くきます子「アレサ母ーい私ゴ指く
をりイーしとて来てゴかッせんなまうんそまでいる物成買ふ
ヤーヨ「そまドやアコるうでゴいやまも「コレサく「お民つまう
ねくことをいの為延津賀さんの法切ハ義者に稀ふことゴけまど
きまの金成かりうんを指して為ことそまゴやう極（今に
じまゴ来くき流で成いるるーい成て又ゆまれこを
員今のこハ来まを指て行ゆまーうんゴとうまくやり

きく仕まハ来ゴアそまゴうゴ津賀さんが何ゴ変て上
ろと兼さんまそうまくようまくこのハかうが宅の不旅金を
知つくゴるうゴう「そうき極（トまりよ代来きもひ来「ヲヤ
私の好ものの成金さーしょト「ゴうくうくうく

うりゝ仕事のゝ子外聞のよろしい「エイやうまゝ」いそんしろ
ハイやく貴こ在とこゝらくあるゝんにとまをお家流でもわ
げる支度とまつ文句「ハゝくゝ」直にかえれるゝうゝいやごへ
いやごもの「ごつまく第「アレサモ言いホ言のやゝ」ヨまりとを
夫婦喧嘩ごゝてゝくゝい強そうまりイゝゝまゝさぞ嫌の
工夫ありイせうゝ「イエモシあゝゝん迷や姫みどもの子爲
ゞやゝまゝ思ふ男と一緒まりてまきくゝまゝまり喧
嘩致ゝてゝくゝさぞゝあゝゝゞろうゝんでとあるのゞ世話の

あまりあまりゞ極くまるゞまりまゝとうまくまるゞもでも出来て
ゞあるゝゞあまる豆腐よりゝ長屋新造さんでも色事も意地も
きまりくあまりまりくゝ。工夫まるゞうゝと月遠くゝらまるまりに成りまる
世ゝりんや貧乏世帯をとりうくゝごろうゞゞます「昨年を町
内の若衆ゞ組ゞをとまくさまるのゞ姫でも出に大盛を抱て
味噌ゝ漬ゝ秋刀魚の蒲焼芋の八文も買くゝ喜びまるま
あるゝまゝゞ徳用ゝくあるまるて「ゝゝ」後悔ゝ先流の
ゞいるゝまりゝあるまゝ世話ゝ今の姫八親のまりけゞゝまりい

きうたをく亭主義のつくてこどもでも出産の祝祭うのと
ゑ男子ごくひやのきうよ男門くねまんイヤまきうこん
ちとゑ部屋ハマア十人ぐれ人めるかハ児ハ壽のきう通
あ人ハ来有おうん達をうち隆ずう迄ぐりまハゼトもあの
うち中に秋天ハの七ツの達ボウンヨく民ヨく モウ七ツ極
爽一コニヨちく おものらつてよ お量と飯食とつかあるハい
ちぎるんぞ紅葉をくッてもあひのじうろう イく工ゑんぐう
ぞうんまゑんざアくぐさくうきイせん実ハ先刻ぐうう絵ぐらふ

おうを ゑん まの二葉さんのこそ ぐうきあるまをうガモシ
今にどうくうりまハハナくちらのめく宝さんもぜハ今日
あうりハ来ゑのさうをうあのものゞテ イく工ゑちさぐ新ゑ
つきうふ新うをまぐ廊よゑること思うくこで西貝絵ちや
しいうをとらくも私のおうばぐゑんぞと今ぐ学ぶうくんで
居ゑんをぐうくと思ひイをト 絵ゑぐちのおちをゑ
ゑんだらうをも友達をうのんでも廊の日の浪宝をうる
まぐでぐをくまハ ゑ東 ゑをに絵りのゑイせんハゑーや ハ

あなたの御ふね所でもこるくうて、途中う宮で第一のてぶ
あうふちまひうと雲ぐらまてく寄りイせうん「ハナニ」
やどのあまきまくトたちのうちまあやうが縁えを「ハ」そしてを
さんハ何知に當御おきこひまたこやりなう後家とやう
うこ「ハイエちうどやアあせうん矢義の城さん所ちまくま
ハまてく長さつしやるとうハてを見ていを「ハテこその城さんの
お宅ハ「ハイうに巣鶴とやうぐくちつを「ハそのうハてぐのう
ゆも意ちとうハあううまたあくまてくものごとををわ

ま入口の障子の外に女の声「ハイチットは見なさい
ます「ハイどなたエ「アノウ廊下くらの羅八さんの奥
おまくさんでございます「ハテテ嫁の声ぐ御ざいんす
「ときくくこ民「こちらでございます「ハイト
障子を張ぬあぐうも手を当をて遠のくハ「サアく
こちらくおよりなさいます「何の内用でございやうの「ハ
家あくこちらくおよりなハ「ハテこちうハをやうさやうおる
ござこいぐうまバ「ハイえしくお遠ヤうません「ハちきハ

唐琴ヲ爲ん　ハイ　ヒ　ハイ　アイウ　ヒ　ハイ　ハイ　ヒ　ハイ　ハイ　ヒ　ハイ　ハイ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春
姿の花
心の見立
此糸

秋
姿の花
心の見立
於由

夏
姿の花
心の見立
栄八

冬
姿の花
心の見立
栄吉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

イエモウおうまの白さいとんぼが飛ぶようんマとんぼ子とけでで
せまりこまを私家へさかぞりぞんじまーうんぞぞ山ろ あまと
動さるのゆちうんにの白まがまるるとのおちやーえ　ちでも
てうるまーくぞもまでつのぞまま花みゆちんもあのぞう
しくてくぞさるとあく上ックくんまのと旦拍さるとあ
絵屋のまさんぞうきまを法ぞーまーてぞんく出雲子
を何ものと見まぞぶ出れ屋屋多り出病身もあ若院居あされ
てぞろと訴あに祝ぞまるも出兄さるもおうくうり拍ぞーと

ちん
まさんぞ出雲と絵とうり白さまとーとそまも出浜ぞ
うの方　　ごの
美りまーてをまアーう出間意あうくんのこ家ろさ
うちの方　　ちの方
まうくくとあ新ろゆ家唐琴ろ屋の方へを寝まつく柳人ちの
うちさぞう　　ちえま
中暗日さるつくろるとあびうくりいとーてゆうく今日ちち
ら〳〵まるうあのくこ〳〵ヨやをうでうりまあるうマ万く雲さんのこ六
ちん
俳うりのあいもうくこまりイーしぞ唐琴ろ屋ぶぞうーイ
あこ　　ぶん
〳〵まぞこちらうぞぶさうやり出浜で白のヨけうま〳〵ちうぶう
まのあるとーてまやくくうくまぞ何こあ　　ちん
〳〵イエく　　あうくんの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

方へおぶさるようにしてでゝ出ましたる子は、そうりイさと
嬉しい様、そばへよりて、お前メヤ世ばあなた方をつけまして
モシ、ようこそ、やう山平の作蔵着に惚まして、そこも居りまた
うもう、ん雅号を百年といふこと引知り、てうふまさんまあ
マアく、名題の名刺がゴロ、くおめでとういづまを迎月行も
おめおさまる様ふり手せうトいふことそこ、よ吟る
名題者甚ふ山系お賜ゴナうべも嬉びいさむ表の色
ゆでこく、開く椅ごとのうえ右目上ゆくそまく、よおさまう家の

大黒屋こゝよりあるせば彼お由ハ薮名糸ゴ妻とあり又山
系ハ半そ亀ゴ方へ引お蝶ゴ素生ハこまとり後古弟成
清の正一ちく迎常ゴ稽るよ一相ゝり丹次郎ゴ
丁ゝ成閑く世話よりし恩ゝのひ操めでゝさ娘ゴまバ
兼黒屋ふ引ゝ流と報る丹次郎ゴ別宅よ名題成ゝる
仙弦ゴうひ藝昌の基金成ひゝく時ふ陳人でお蝶ハ本妻
とゝり家八もひゝくゝ貞実ゴまバ親の古郎へ
ままゝくお紙屋さゑとゝゆまハまいづまます、その中賜ゝく

新造番付墨色の板刷人形　番人はいづれも名ぐ
めでたくさうくまきと番人はそれ〳〵羅紗うちり四人の女
子はお四紙羽織一とり　此番紙二だんとり　三番目紙第八
とり　四人目紙お蝶とさだめ　峯のおやまとまく　門ろは姉妹
のやくとなり　子宝ちりくまうけつて　幾代ゆりの春の
梅実のり成こと　寿くめでたく　第九紙おさめたぐりね

春色梅児誉美寒の十二大尾